

創価大学文学部岩川ゼミの活動（高齢者に関する取り組み）

創価大学文学部岩川ゼミ

大島櫻子、国武純子、佐藤秀幸

瀬谷歆多、富沢愛美、長崎彩音

指導教員 岩川幸治

創価大学文学部岩川ゼミでは、「生活問題と福祉」をテーマにして学んでいます。人々の暮らしを豊かにし、誰もが幸せに生きていく社会をどのようにしたらつくることができるのかを考えています。ゼミでは、学生が自ら学びたいテーマを設定し、地域に出かけ、様々な取り組みをしている人々と出会い、誰が、何を、どのようにしているのかを知り、さらに「なぜ」という疑問をもち取り組みに込められた人々の気持ちを理解することに努めることで、どのような取り組みが必要なのか、どのように取り組んでいく必要があるのか、自分で考えて行動できる力を高めることを心がけています。ゼミで活動する際は、高齢者、子ども、障害者、地域と対象を問わず地域の方と関わり交流しながら、つながりをつくることを大切にしてきました。ゼミでの高齢者に関する取り組みの一部を紹介します。

スマートフォン講座（2020年度3回、2021年度4回、2022年度7回）

スマートフォン（以下、スマホ）は操作が難しく、使いづらいと感じる高齢者は多い。スマホを使えるようにすることで、高齢者が少しでも快適にかつ楽しく暮らせるようにすることを目的にしている。スマホの操作に慣れている学生が講師となり高齢者にスマホの操作を教えることで、高齢者は気軽にわからないことを訊くことができ、学生は得意なことを活かすことができる。問題が解決したときの喜んだ笑顔を見ることが、学生にとってのやりがいとなっている。普段あまり関わりがない高齢者と話をすることで、新たな発見があり楽しい時間を過ごすことができている。スマホ講座を通して、高齢者と学生とがコミュニケーションをとることで、高齢者が知りたいと思っていること、楽しみにしていることなど、高齢者のニーズ把握にもつながる。そのニーズに応えられるように、今後のゼミ活動や個人での活動を展開することが可能となる。

新型コロナウイルス感染症による高齢者の生活の変化についての調査

新型コロナウイルス感染症の拡大によって、人と人との関わりが制約を受けるなかで、孤立を深めている高齢者が増加していると考えられる。そこで、八王子市内の二つの地域を取り上げ、それぞれの地域において高齢者がおかれている現状と課題、必要な支援は何かを明らかにするために、八王子まるとサポートセンター（八王子市社会福祉協議会）やサロンで活動している方を対象にインタビュー調査を行った。その結果、二つの地域ともに、外出する機会が減少したため、足腰が弱くなり精神面でも苦痛を感じる人が増えたようであった。個人の問題としてだけでなく地域の問題として捉え、つながりがもてる機会をつくりつながりを絶やさぬ工夫が必要である。一方で二つの地域では、コロナ禍におけるイベントやサロンの開催時期や人を呼び込む方法、地域の人とのつながり方に違いがあった。

高齢者と学生の交流会（対面）

普段関わるのが少ない高齢者と学生が、お互いを知り楽しく交流することを目的にして、高齢者あんしん相談センターと相談をしながら、学生の企画・運営のもと開催。交流会の内容は、手指を使った体操とピンポンゴルフゲーム（第一部）、しおりづくりのワークショップとおしゃべり（第二部）。ゆっくりと無理なく進めることを心がけ、全員が楽しめたあつという間の80分だった。参加した高齢者からの感想として、「普段は家にいることが多いので刺激になった。若い人と関わる事ができて、エネルギーをもらうことができた」。学生からは、「自分たちもゲームを楽しみながら高齢者の方と接したため、全員で楽しむことができた。この機会をきっかけにして、さらに高齢者と学生のつながりをつくっていきたい」という声があった。

地域のサロンへの参加

高齢者を中心とした居場所や生きがいづくりの場となっているサロンに学生が参加。参加者と工作や小物づくりをともにすることで、自然と会話が生まれ、それぞれが作った作品を見せ合うことで自分にはない発想に気づいたり、お互いの人柄を知ったりすることもできた。サロンに来ている参加者とお話することで、多様な世代の人と関わることに對する抵抗感を少なくすることにもなる。また、サロンで行うイベントの企画をさせていただき、運営する側のやりがいや苦労を感じることができた。